

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL. 01081)

「新しい文明」の萌芽を探る
ー日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

(科学・技術分野)

「無意識の哲学」により文化と思想に
大きな影響を与えた人物、フロイト
ー「精神分析入門」ー

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プログラム

本ブックレットは、2020 年 8 月 24 日開催の第 81 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る

— 日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどる —

「無意識の哲学」により文化と思想に 大きな影響を与えた人物、フロイト

— 「精神分析入門」 —

精神分析はメタサイコロジーや深層心理学と言われるが、「メタ」が「高次の」という意味となるなら実に偉そうなので、私は深層心理学という言葉が好みである。深層とは高いところではなく、裏側や奥であり、それは本人にすら気づかれていないことである。時には闇に隠れたもので「うがった見方」をしないと見えないのだが。例えば症状には無意識の意味があると考え、報告された夢の話はいつも加工されているので夢も潜在夢こそが本当に見られた夢だと言われることになる。その心の在り方を地図のように考え、広がりや空間のような捉え方をするなら、無意識、前意識、意識の3つの領域にわかれるとフロイトは考えた。日本語でも言うように、本音と建前、表と裏と分けてその間があるという発想である。次いで力関係から見た無意識というのは、その裏側にあるものがダムのようにせき止められ、抑圧されていると捉えられている。特に蒸気機関を眺めていた時代の人々は、押さえつけられたものには何かエネルギーがあり、管理に失敗すると暴走をし始めるというイメージを共有していた。

きたやま おさむ (Osamu KITAYAMA)

本名 北山修。1972 年、京都府立医科大学卒業後、ロンドンのモーズレイ病院およびロンドン大学精神医学研究所にて 2 年間研修。1980 年、北山医院（現・南青山心理相談室）を開設。精神分析家・心理療法家として活動する。1991 年、九州大学教育学部助教授に就任。1994 年、同教授。1998 年、九州大学大学院人間環境学研究院教授。2001 年より同大学院医学研究院教授を兼任。2010 年 3 月、九州大学を定年退職。2010 年 4 月白鷗大学教育学部特任教授。2011 年、国際基督教大学教養学部客員教授。現在九州大学名誉教授。2021 年より白鷗大学学長。

『劇的な精神分析入門』、『最後の授業』、『意味としての心』（みすず書房）、『むなしさの味わい方』（岩波新書）など著書多数。

目次

I はじめに ～フロイトという人の「ゲーテ賞」

II 精神分析とは何か

III いくつかの特徴

(1) 無意識の心理学（メタサイコロジー、深層心理学）

- ① 局所論的観点：意識と無意識
- ② 力動的観点：抑圧されたもの、欲動、葛藤
- ③ 劇的観点
- ④ 問題

(2) 言葉でアプローチする

- ① 方法としての言語化
- ② 解釈と意識化、洞察
- ③ ヒステリー患者から学ぶ：カタルシスという情緒の解放
- ④ メタファーで物語を紡ぎ出す
- ⑤ 問題

(3) 過去（幼児期）の重視：心の台本が決定される時

- ① 自由連想により想起
- ② 治療者の再構成
- ③ 発達理論と乳幼児観察
- ④ 比喩の源泉
- ⑤ 問題

(4) 転移を理解する

(5) 心の真実を知る

- ① 自己実現はない
- ② 「日本の精神分析」の二重性？

質疑応答

2020 年 8 月 24 日開催

第 81 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：「無意識の哲学」により文化と思想に大きな影響を与えた人物、フロイト
—「精神分析入門」—

講演者：きたやま おさむ

(文中敬称略)

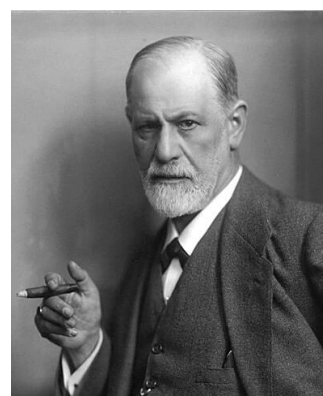
Ⅰ はじめに --フロイトという人の「ゲーテ賞」

本日は、フロイトについて話ができるということと、何もかもオンライン化されたり、キャンセルになったりする中で、「ゲーテの会」に呼んでいただき、久しぶりの外出で嬉しく思っている。

本日お話しするフロイトという人は、ノーベル生理学・医学賞を受賞したかったが、一方で文学者に評価され、芸術家と大いに交流があった。フロイトの文章が今も残っているのは、文学的な要素があるからだと言われているほどで、彼が書いた論文やエッセイは科学的文学であるという評価を今も得ている。だからこそ、説得力を持っているのではないかと思う。もし、フロイトが単なる科学論文を書いていたら、100 年間も読まれ続けることはなかっただろう。それを裏付けるように、フロイトはゲーテ賞を受けている。その理由が本日、ここに伺ってよく分かったのだが、三宅先生に話を伺ったところ、ゲーテという人は科学者であり、文学者であったということなので、フロイトにふさわしい賞だったと思う。

ただ、フロイトは、じつはその受賞をあまり嬉しく思っていなかったように、私は伝記などから推察している。その頃、フロイトはユダヤ人差別と闘っている真っ最中で、ノーベル賞が取れなかったのはそのせいだと思っていた。また、フロイトは自身が開業していたベルクガッセ 19 番地の少し上の方にあったウィーン大学の教授になりたくて仕方がなかったのだが、結局その途中の山の道(Berggasse 通りの意味が山の道)に開業し、途中で終わったという感じだった。ウィーン大学まで登り詰められなかったのである。

しかし、本来、ゲーテ賞は非常に名誉なことであり、ゲーテ賞を受賞するような文章を書いていたからこそ、彼の文章は今日まで残っているのである。我々は再度このことを噛み締めるべきだと思う。科学論文だと思っていると、フロイトを読み損なう。やはり、言葉に説得力があることが精神分析論の力だと思うので、本日は、それをお伝えできれば良いと思っている。



ジークムント・フロイト
(1856–1939)
マックス・ハルパーシュタット,
Public domain,
via Wikimedia Commons

もう一つ、私にとってフロイトは、ドイツ語で読むフロイトではなく、英語で読むフロイトである。最近の精神分析は、国際学会ではほとんど英語で訳されたものがスタンダードで、Standard Edition という名前が付いているが、フロイトの弟子であったストレイチーという、これもまた文学者ともジャーナリストとも言えるような、英語もドイツ語も話せた人が、フロイトの言葉を英訳したことにより、フロイトはさらに分かりやすくなったと言われている。これについては娘のアンナ・フロイトが「父の書いたものは英語で読む方が分かりやすい」と証言しているほどである。非常に面白いことだと思う。なぜ英語の方が分かりやすいのかという研究もすでに行われており、本日はそこまで立ち入ることはできないかもしれないが、私も英語でフロイトを理解している。名訳で、ほとんどドイツ語と一対一対応をしているようなところも素晴らしいと思う。普通は、言葉が変わると全く違うものになってしまうという問題が生じるが、フロイトのドイツ語に対応させたような英語訳である。

ただ、一点だけ批判があるのが、フロイトの「Trieb(欲動)」を英語で「instinct」と訳したために「本能」という意味だと誤解を与えてしまったことである。フロイトが「Trieb」で意味したかったのは、英語で言うところの「drive」である。「drive」は「突き動かすもの」で、運転手を driver と言うし、あるいはねじ回しのことも指すが、「推進力」のようなものを無意識に感じるということである。「instinct(本能)」は食欲や性欲など目標がはっきりしているものを称するが、目標がはっきりしないけれども突き動かすものが後ろにあるというのがフロイトの本能的なものについての考えであり、それを「trieb」と呼んだわけである。その辺りの英語に訳し切れないものも、ドイツ語には残っているということである。

II 精神分析とは何か

さて、フロイトにおいて、あるいはフロイトのフォロワーズとでも言うべきフロイディアンと言われている人たちは、精神分析をどのように捉えているのか。

精神分析は人間理解の方法であり、「こころの理解」の方法と言ってもよい。同時に、理解して治療することを目標にしていた。そして、その理解の理論として磨き上げているものがあり、これがフロイトという天才によってほとんど完成されている。その後の精神分析家、フロイト研究者が付け加えたものがそれなりにあるが、それを踏まえての「無意識」の紹介である。したがって、ほとんどフロイトに依っている。

III いくつかの特徴

(1) 無意識の心理学 (メタサイコロジー、深層心理学)

フロイトの考えた精神分析の特徴は、まず「無意識の心理学」であり、つまり「無意識」を理解することである。フロイトは、人間行動や神経症や人間の文明について「無意識」を考慮し、理解しようとした。それを「高次から見た」という意味で「メタサイコロジー」と

呼んでいるが、私は「深層心理学」=depth psychology と呼んでいる。これは、人間の心にすみ、奥、闇などを上らせないようにしている抑圧された領域を認めるということである。

日本語はとても面白くて「心」を「うら」と読んで「心の裏側」という意味で「心(うら)恥ずかしい」という言い方をしたりする。人間の心のあり様を「うら」と呼んでいるところに共有する感覚がある。表は意識しているところ、光の当たっているところで、奥が闇という感覚である。この裏側にあるもの、すみにあるもの、心の内側という表現は日本語では表現しやすい。そのように、心には奥と外側があるというイメージは、日本語でも共有しやすいと思うので、「深層」と「表層」というイメージで「無意識の心理学」は「深層心理学」と呼べると思っている。

① 局所論的観点：意識と無意識

したがって、地図のように心を理解し、それを「topographical」=局所論的観点と訳している。心には地図があり、そこに奥と表、表と裏、あるいは本音と建て前というイメージを持って、フロイトは心の二重構造を考えている。無意識と意識が最も分かりやすい区別だが、二分法で事態を二つに分けて考えているわけである。つまり、フロイトは二分法論者であり、二分法で奥と表、意識と無意識に分けて考えているが、その間には壁があって、意識しようとする抵抗を感じさせられる。別の言い方をすると、主観と客観も対応するところがあるし、外的現実と心的現実と呼び分けることもある。あるいは、物的現実と心的現実、表と内側とも言う。

② 力動的観点：抑圧されたもの、欲動、葛藤

もう一つ、無意識の特徴に「力動的観点(dynamic)」がある。これは当時の物理学に影響を受けているが、虐げられたもの、押し殺されたものなど、奥に抑圧しているものがあって、意識しないようにされているという、ダムが堰き止められているようなイメージがある。

また、フロイトの時代は鉄道が走り始めた頃で、フロイトは旅が大好きだったので鉄道に乗る場面が出てくるが、何とフロイトは汽車恐怖症だった。そのようなエピソードは、他にも「フロイトの神経症」というテーマでいろいろと出てくるが、実はユングがフロイトから独立するとき、フロイトはユングの前で失神している。フロイトの神経症の最も際立つところは、気を失うことである。フロイトは、ほとんどはしっかりしているが、まれに気を失って倒れるという、人間臭いところがあった。それもユングの前で 2 度ほど倒れているので、それについてフロイトは自己分析を進めているが、後継者の分析によれば、酒を飲まないユングに無理に酒を飲ませて、「勝った」と思った瞬間に自分が失神したことから、これをフロイトは「勝利を収めた瞬間に罪悪感を覚えて倒れた」と解釈しているのである。ある理解では「成功を収めるとだめになる」という人物の軽い症例だと分析しているようである。

フロイトの人間臭いところを紹介したが、これは、フロイトにも抑圧されたものがあると

いうことでもある。抑圧されているから、ダムに水が溜まるように憂さが溜まり、それを発散させなければならなくなる。そして、その抑圧されているものには生物学的な基盤がある。これを「欲動」と呼んでいるが、前述のように、目標がはっきりしないけれども突き動かすものがそこにはある。それを心のものとして意識しようとするところで、我々が経験するのが「葛藤」である。

そこにあるものの代表的なものが「性欲」であるとフロイトは考える。この「性欲」は、子どもが母親にしがみつきたいとか、乳幼児が唇で母親の乳首に吸いつくような感覚まで含めているので、生物学的な基盤がある。「無意識」の奥には身体があるとして、身体からエネルギーを得て「リビドー(libido)」が生まれた。しかし、目標がはっきりしないために、何に飛びついたら良いのか分からない。それで思わず何かに飛びついてしまうと、それは不道德な行為になったり、犯罪であったりするもので、それは抑圧しなければならない。この辺りの理解は、問題行動や神経症、乳幼児の心のあり様の理解に役立つ。「無意識」は心と身体を橋渡しする領域、奥は身体に根差していて、それが心理化されて「性欲」として感じさせられる。そして結婚や生殖、性生活等の我々の行動にも影響を与える。もう一つの drive は攻撃性で、「人を殺したい」とか「傷つけたい」という形で現れる。

現代では、このような性的な抑圧は、フロイトの時代に比べると、むしろ文化の中である程度は解放されているところがあるが、当時の中産階級の上くらいの人たちにとって性欲は大変厄介なものだった。特に女性の性欲については、「若い女性は結婚して子どもを産むことだけが人生の幸せ」と思われていた時代なので、娘たちは「自分の人生を選択したい」と思ったり、熱い恋心を抱いたりすると、次々にヒステリーを発症せざるを得なかった。そういう時代的な背景がある。

現代は性欲だけではなく、むしろ攻撃欲求による「人を傷つけたい」という気持ちを抑えることが人間の大きな課題となっている。コロナ禍の時代も同じで、ターゲットを見つけないといつ攻撃するか分からない。毎日のように誹謗中傷が起こりやすい状況なのである。

これらの「欲動」は、満足することや荒唐無稽な空想に耽ることによって場を得ようとする。それを快楽原則と言う。それに対立するのが現実原則、あるいは、エネルギー節約のためには工夫しなければならないという経済原則である。そういう原初的な子どもっぽい考え方を一次過程(primary process)と言い、このように適応のために話している思考が二次過程(secondary process)=現実的な思考と呼ばれる。分かりやすく整理するとこのようになる。

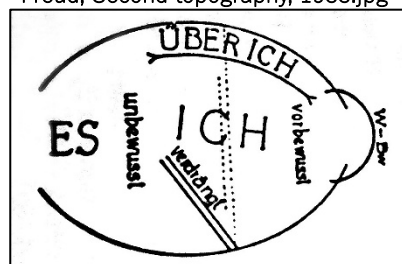
経済論的な観点を持つというのは、溜まっているから小出しにしていくと楽になるとか、冗談を言うことで解放できるということである。昔はよく「なぜ関西にはフロイディアンが少ないのか」と言われたが、それは関西には吉本興業があるし、阪神タイガースが勝っていたら神経症が少ないとも説明されていた。しかし、今は吉本にも皆が簡単にお金を落としてくれないし、阪神タイガースも勝てないことがある。ただ、ヤクルトスワローズには勝つの

で、スワローズファンの私は腹が立つ。なぜ私がスワローズファンかと言うと、京都駅前で育ったので国鉄スワローズのファンにならざるを得なかったからである。やはり育ちが影響を与える。私は昔、神宮球場というのは平安神宮の裏にあると思っていたくらいである。しかし、巨人戦ではタイガースファンとは仲良くしたい。このように、冗談を言うと楽になる。冗談は無意識の説明にふさわしいと言われていて、スッキリするし、笑うことを通してリビドー、情動が解放される。

フロイトはヒステリーの治療の際に、ある無意識に対して言葉を与えて発散させたが、その無意識に対するアプローチの仕方が成功しているかどうかは、情動の解放による。エネルギーが解放される、あるいは情緒的なものが発散されて初めて治療的に有効であると考えたということであり、それを「カタルシス」と言う。カタルシスとは、下痢や消化管の排出を言う。

もう一つは、構造論的な観点である。心は構造を持っていて、パーツに分かれている。よく言われるように「エス」と「スーパーエゴ」があって、それを自我が統合して処理しようとしている。無意識にあるもののことをドイツ語では「エス(それ)」と呼ぶが、英語で言うと「it」となり動物や子どもを意味するので、無意識には動物的なものや子ども的なものがあることを「エス」で示していると言える。しかし、「エス」と言う日本人にもアメリカ人にも分かりづらいので、これを訳したストレイチーは「イド(id)」という別の全く関係ない用語を使った。それで何か特別なものがあるかのようなイメージを与えたことが、ドイツ語よりも英語の方が分かりやすいと言われているところかもしれない。

Freud, Second topography, 1933.jpg



Sigmund Freud; photographic reproduction by Rolf Nemitz, Public domain, via Wikimedia Commons

③ 劇的観点

また、劇的観点もある。これは心の無意識の動きを、登場人物がいる劇のように表現するというものである。心の奥にあるものを天使と悪魔の戦いであるかのように語ることができるので、劇のような形で無意識について物語ることができる。こういうことをフロイトもよくやっているので、劇的観点と呼べると思う。劇の比喻を使えば、子どもの頃に母親や父親と経験した心のあり様が台本となって書き込まれて、成長してからも母親的な人や父親的な人と同じような台本を繰り返してしまうというように、無意識を説明できる。

この無意識が短絡行動で表現されてしまうことは、英語でアクティングアウト(acting out)と翻訳されている。ドイツ語 agieren でも「演劇」という意味を持つが、日本語ではこれを「行動化」と訳している。「行動化」と訳してしまうと、短絡的に情緒が表現されてしまったり、行動に移されてしまう＝乱暴とか、人に襲い掛かるというイメージを与えるが、「アクト」には英語でも「演劇になっている」という意味があるので、これは「演劇化」という

意味でもある。これがプレイセラピーという子どもの治療などでは重要な発想になる。プレイセラピーは「遊戯療法」と訳されるが、「プレイ」という言葉も「演劇」という意味を持っている。英語もドイツ語も「遊び」は「演劇」という要素を持つが、日本語では上手く伝わっていないところがある。演劇においては無意識が形になるので、演劇を見ると欲望や殺人や性欲が形になって我々の代わりに表現される。そういう演劇的要素を無意識に認めて、演劇になることで我々はそれを発散している、そういうイメージを共有していただきたい。

フロイトはこういう無意識を描き出したわけである。

④ 問題

しかし、この考え方には批判もある。何もかもを心の無意識で説明することを大問題とされているのである。多くの哲学者がこれを批判するのは、無意識というものを認めた途端にどのようにでも言えるので、「心はこうなっている」と言っても反証のしようがない。そう言えるかのような解釈であるとして、それは「そうとも言える」という解釈学であると指摘されている。つまり、乱暴な理解がいくらでも可能になってしまうという批判である。

しかし、私は紹介した例えのように、冗談がどうだとか、野球の比喻で言えば、野球は「1塁で殺される」「2塁で刺される」「3塁を盗まれる」というスポーツであり、やってはいけないことが全部許されるようなところに人気がある。「巨人なんか殺つてしまえ」と言うことができるのである。こういうところは説得力があると思うので、この「解釈学」は乱暴かもしれないが、非常に多くのことを説明してくれるし、こういう捌け口を失ったものが問題行動を起こすという理解は、今も有効だろうと思う。

もう一つ、「無意識」を認める学問の限界は、外的現実の重要さをあまり考えないところである。何でも心の中で説明してしまうわけだが、例えば、今の我々の心のあり様は、外的現実であるコロナの問題を無視して理解することはできないわけであり、心の外の環境問題等のある程度考慮しなければ、人間の心のあり様は説明できないのではないかという限界があると思う。多くの場合、精神分析は心だけである。

したがって、その点から行動療法や認知行動療法の人たちは精神分析を批判する。何とでも言えるわけであるから、もっと現実で、あるいは観察できることだけで説明してはどうかと、そういうアプローチの方法からは批判されている。

(2) 言葉でアプローチする

① 方法としての言語化

ここまで無意識について説明してきたが、では、この荒唐無稽な意識できないものをどのように取り扱うのかというところで、フロイトは言葉にすることを勧めている。言葉にすることと、それに伴う情動の解放である。しかし、フロイディアンは、フロイト以降では特に言葉にすることを重視し始める。私は情動の解放も大変に重要だと思うので、その両方を重

視したいと思っている。

しかし、この方法としての言語化が、ユング派や他の学派から批判されるところとなっている。精神分析は特に言葉にすることを大事にしているが、それは、先に無意識化されているとしているので、意識する方法としての言語化である。「殺ってしまえ」とか「殺してやりたい」ということと共に攻撃性の表現があるということで、解釈や言語化、意識化、あるいはそれによって得られる洞察(気づき)、このようなものが治療的であると考えている。それは表現するので、表出あるいは情動の解放につながる。

② 解釈と意識化、洞察

もう一つは、名前を付けて操作可能にすることができるということがある。例えば、「不安」という言葉を手に入れると「不安がここにある」と言える。そして、整合性があって言語は筋を通してくれる。理性的なものの支配下に情緒や無意識や性欲等を置くことができるのである。したがって、言語が自分の考えていることを客観的に内省することを手伝ってくれるという意味で第三者性があり、「誰にでも不安はある」というように第三者が捉えることができる名前をつける、これはとても大事な言語化の効果である。

つまり、腑分けをした杉田玄白の時代と同じことが起きるわけである。臓器に名前がついていなければ腹の内は操作できない。つまり、触ることもできなかった臓器に「これが胃」「これが腸」と名前を付けるだけで、腹の内を取り扱えるようになるというイメージである。このように、言語の第三者性、客観性は、例えば「腸」と言うと誰もが腸とは何かが分かるように、「不安」や「葛藤」と名前を付けると共有でき、第三者性が生まれる。主観的なものが客観視できるようになるという効果があり、筋を通すことができるようになる。

③ ヒステリー患者から学ぶ：カタルシスという情緒の解放

それで楽になったのがヒステリー患者である。ヒステリーというのは、今から 100 年くらい前の中産階級の上以上の社会でよく見られた症状で、例えば、映画の『風と共に去りぬ』などで見られるように、主人が戦争で亡くなると倒れ、あるいは息子が帰って来ると倒れるというように、倒れる女性がとても多かった。倒れること以外に自分の情緒を表現する方法がなかったようだが、そういう時代背景とともに考えると、それを言葉にすることがどれほど彼女たちを楽にしたらろうか。つまり、それが父親に対する愛情だったとか、あるいは息子に対する愛着と呼んでも良いような愛だったとか、名前がつくと女性たちはとても楽になっていったという。ヒステリー患者の言語を得たときの喜びと情緒のカタルシスが、彼女たちを助けることに大変に役立ったのである。

ところが、当時は男社会だったために、女の病気を助けても精神分析は居場所を得られなかった。しかし、心の台本にトラウマや葛藤や不安を抱えて発症するのが女だけの病気ではなく、男にも起こるということが分かったのが第一次世界大戦の時の戦争神経症の問題だった。男たちもいつ死ぬか分からない状態で一晩過すと、翌日から役に立たなくなっ

まう。そういう外傷体験や戦争体験などが神経症を作り出すことが男にも起こることが分かり、初めて精神分析は世界に広く認められるようになっていった。このように元々の発見はヒステリー患者から学んだことに始まるが、精神分析が世界的な広がりを持つようになるのはそういうきっかけがあったわけである。

④ メタファーで物語を紡ぎ出す

言葉は「メタファー」と呼べるが、例えば、「心に傷を負った」と言っても本当に心に傷があるということではなく、身体の傷を比喩的に使っているだけである。つまり「心の外傷体験」という言葉を皆さんと共有しているが、これはメタファーである。元々心には名前など付いていない。しかし、身体や現実から言葉を借りて「心の傷」と呼ぶと形が与えられて取り扱い可能になる。そして、相手の承認を要求できる。共有することもできる。それによって、自分の人生を物語ることができるようになることが治療的なのである。単に言語を得るだけではない。言語を得て、自分の人生を裏も表も言葉で表現し、小説のように、伝記を書くように、ライフストーリーを語り始めることで、我々は楽になっていくわけである。

この治療法だけ独立させた老人の回想法は、老人がこれまでの人生を語ることで楽になっていく。私もここで国鉄スワローズの話から始まって「良かったのは野村監督の時だけだ」というようなことを言うだけでほっとする。今もスワローズが勝っているか負けているか気になりながら話をしているという心の状態を、メタファーで語るのである。

私が「阪神」と言ったら、別に阪神タイガースだけを意味しているわけではなく、阪神タイガースの背後にある、私が京都から大阪に出て行ったときの梅田の様子も道頓堀の蟹の看板も全部含めて「阪神」である。あるいは、「京都」と言うときは「京都の人は『ぶぶ漬けでも食べて行かへんか』と言いながら、腹の底では何を考えているか分からない。精神分析から考えると抑圧だらけだ」という話をするだけで楽になる。本日はそのために来たようなものである。何もかもキャンセル、何もかもオンラインになっている中で、これだけの人を前に話を聞いてもらえるだけでも楽である。これが言葉で人生を語ることの効果と言える。これで講師料をもらって帰れるのだから最高である。私は桂文枝と友だちだが、あの人は何万人を相手に話をして儲けているので、羨ましいと言えば羨ましい。

このように言葉を得て、心を紡ぎ出して情緒とともにそれを語って、情動の解放と、言語を得ることによって人生を語り直す、つまり何度も何度も語ることを通してより良い物語にしていけることが治療だという人もいる。私もそうだと思っている。

⑤ 問題

しかし、それも問題になる点がある。言葉の重要性を説かれても、それは言葉を上手に使える人だけのことだという問題である。よく見ると、フロイディアンは口が達者である。フロイトもそうだった。フロイトは少し話をさせただけで何時間も自分の症例を話したという記録が残っているくらい、言語的に達者な人だった。だから、非言語的な治療や、あるい

は言葉を上手く使えない人、子どもの治療、あるいは重症患者など、心を何かの象徴に置き換えて表現する象徴化能力を十分に発揮できない人たちにとっては、この精神分析は圧倒的に限界があるのではないかとされている。

あるいは、人の情緒的な交流は言語ではないと言われるが、そういう非言語的な交流はどのようなのか。私が九州大学に就職した当時は「あまり言語、言語と言うと、九州人に嫌われる」「京都人は言葉で言わない」と言われた。そういう文化の違いや、フロイトの言語化能力に対する非言語的交流の重要性などの問題がある。関西などでは箱庭療法、あるいは表現を大事にする芸術療法のアプローチ等が重視されるし、重症患者は身も蓋もないので、あまり言語、言語と言っていると却って悪化させるという問題もある。

このように問題は、言語を巡って対立点が明確になる。言語をどこまで重要視するのかという問題である。「話す」というのは心の中を放つことであり、話してすっきりするタイプはよいが、言うに言えない思いを抱えて表現できない人たちは「言語、言語」と言われると抵抗を感じ、困難が生じて、却って悪化させてしまうという問題点を忘れてはならない。

（３）過去（幼児期）の重視：心の台本が決定される時

① 自由連想により想起

言語にすると何が出てくるのか。言葉にして、何度もセッションを積み重ねていくと、心というものは過去へ過去へと遡って、親しい者ほど過去の昔話に花が咲く。自由連想という方法によって、心に思い浮かぶものを言葉にするようにアプローチすると、目の前のことを言い尽くしていくので、人の心は過去へ過去へと遡っていく。

つまり、問題は過去にあるということであり、人は過去に起こったものを皆引きずっている。「恥ずかしがり屋なのは、過去のどこかで大恥をかいだから」というモデルがある。外傷体験も、過去に傷ついたことがあるから現在を上手くこなせない。一度エレベータに閉じ込められると、エレベータに乗る度に「まだ閉じ込められるのではないかと不安を感じる。すべて過去に基づいて我々は現在を理解しており、過去から引きずっている。

特に魂の傷つきやすかった乳幼児期、子ども時代が現在も相変わらず痛んでいる、あるいは傷ついているという状態で足を引っ張る。皆さんがたとえ 60 歳になっても、70 歳になっても、7 歳の時に弟に饅頭を盗られたときの思いみたいなものは忘れていない。あるいは、今でも近所にいた奴のことがムカつく等、魂の柔らかかったとき、あるいは弱かった頃の影響力は相当に大きい。



Freud Museum (Couch and Office) in 2024
Marcelo, Public domain, via Wikimedia Commons

② 治療者の再構成

乳幼児期の重視「心の台本が書き込まれる時」というのは、ボウルビーが言う「アタッチメントセオリー(愛着理論)」は母親との関係がその後大きく影響するということで、信頼に満ち満ちた関係なのか、あるいは不信感に満ち満ちた関係なのかを分類すると、それがそのまま 30 年経っても同じように人間パターンの基になっていることが多い。

そこで、過去から引きずってきたものを再構成するが、構成とは過去から断片的に想起されて現在に持ち込まれる記憶を、物語として構成してあげることである。「あなたはお母さんに愛されたかったが、お母さんは分かってくれなかった。それでお父さんに頼ったが、お父さんは酒飲みで相手にしてくれなかった。そのため、寂しさを抱えて相変わらず彷徨っているのですね」というような構成の仕方で、人生物語を現在において紡ぎ直す、あるいは自叙伝を書くというようなことを手伝うと、現在の言動が理解できるようになる。

人は過去に決定された台本を、相手役を変えながら何度も何度も反復してしまう。それは気づいていないから書き直せない。まず気づくことから始めて、言葉を得ると、書き直すことができるかもしれない。

③ 発達理論と乳幼児観察

これは凄いことであり、精神分析の狙いはこういうことである。したがって、我々は乳幼児を観察し、乳幼児の心を理解すること、そして乳幼児がどのように心を発達させて世界と関わり合っていくのかを観察して、言葉として学習することで、皆さんが現在抱えているものの理解の手伝いができる。

つまり、精神分析家が勉強しなければならないことや、あるいは勉強になることは発達理論と乳幼児観察だと言われている。そして、心の発達を勉強することが我々の基礎学問の一つであると言われている。

④ 比喩の源泉

そこは比喩の源泉である。比喩によって「あなたの心の中には子どもがいて、その子どもは相変わらず腹を空かせてお母さんが来るのを待っている。でも、お母さんは来ない」という話ができる。皆さんもそうで、本当は心の甘えん坊が眠くて家に帰りたいくらいなのに、今ここで立ち上がって帰るのは失礼なので帰れない。だから、そこで寝ているわけである。

そのように、過去から引きずっているもので現在を理解できるという、それも言葉で取り扱うことができるようになるということである。

⑤ 問題

しかし、最初から子どもの気持ち、皆さんの気持ちに触れるのはあまりにも早過ぎるし、深過ぎるので、何回かセッションを重ねてアプローチしなければならない。

もう一つ批判があるのは、先生が取り扱っている過去は本当にあった過去なのか、それと

も過去だと言われている物語なのかという議論である。私は、物語としての真実だと思っている。歴史的に本当にあったことなのかどうかは、今から考え直すことはできない。しかし、「私がこう思っている」という過去があるなら、それは母親から聞いた話、あるいは写真を見て思った話、あるいは今引きずっている一つのファンタジーだったりするので、むしろスペンスという人が「narrative truth」と呼んだ「物語上の真実」である。それはその通りで、迷子になったときも「二度と会えない」と思うか、「すぐに迎えに来てくれる」と思うか、そのときの体験は人によって違う。額から血が流ただけで「死ぬかもしれない」と思ったことと、「単なる怪我だ」と思ったことはやはり違う。前者の方が心の傷が深い。それはやはり物語として引きずってしまうからである。「私は大怪我をすると死ぬ。いつ死ぬか分からない」というような不安に陥ってしまう。

私は京都駅から歩いて 10 分くらいのところに住んでいたが、「家が燃えているのではないか」という不安を抱いたことがある。今でも京都駅で降りると思い出す。角を曲がると家が燃えているのではないかと思うのである。それは実際にそういう経験があったからで、実際は手前の家が燃えていたのだが、自分の家が燃えていると思い込んでしまったわけである。つまり、過去に本当にあったことは「手前の家が燃えていた」ということだが、私にとっては「私の家が燃えた」ということが真実になる。私が作り上げた物語が真実なのである。したがって、本当にあった話、歴史的な真実よりも、物語としての真実なので、調査の対象になり難い。つまり、二人が語り合ってみつけていくしかない真実であると思う。

そういう真実があるから、「今日はこうなっている」という一対一の因果関係はそれほどないと思う。むしろ、それを悲劇的に考えてしまって「私は死んだ方がよい」と思うから現在が苦しいので、「明日がある」と思い直すことで書き直すことができる人生物語であるという考え方が、私が馴染んでいる考え方である。過去をそれほど強調するのではなく、未来はどうなのかを考える。あるいは、精神分析は決定されている面を強調するが、私は少し違って、少し書き直すとか、主体的に生き直すというところを強調する。

しかし、フロイディアンには、もっと悲劇的に因果関係を語る人がある。それを批判して、人間はもっと主体的な動物で、もっと自分で書き直す能力があつて、そういうものを自己発見していくことを通して生き直すことができるので、あまり一部の精神分析家のように「これが原因だ」「あれか原因だ」と定義する過去の取り上げ方は嫌いだという(意見もある)。あるいはそれに対する反論で、ロジャース派の方々は「あまり理論ばかりではなく、もう少し虚心坦懐に話を聞いてはどうか」と批判している。

(4) 転移を理解する

次は「その過去は現在にも持ち込まれる」ということである。父親を怖いと感じていた人は、医師やサイコロジストのことも怖いと言うので、過去の反復はここにも持ち込まれる。そこで、これを取り扱うのが転移である。転移とは、過去が現在にも転移してくる、心の内側にある台本がここにも反復するということである。こういうものを取り扱う。

今現在も反復されているという理解で、現在を取り扱うことが過去を取り扱うことになるという、そういう転移理解になるが、これはもう少し専門的な理解になる。

結局、このようにしてフロイトが狙ったことは、我々が心に隠している真実、外傷体験にしても、例えば、育ちが良さそうな人が実は育つ中で苦しんで悲劇的なことに巻き込まれていたという真実に目を向けて、我々はそれを取り扱うことができるようになることを狙い、心の真実を知ることが重要であると強調する。

（５）心の真実を知る

① 自己実現はない

最後に問題点を挙げると、他の学派が言うところの自己実現というものが、フロイトにおいては、これは私の好きなどころで、好きなフロイディアンで留まろうとしているところだが、このように過去を引きずる、本能的なものや欲動と呼ばれているものを言葉で表現することは可能であっても、過去の幸せ、あるいは過去に求めていたものが現在もう一度訪れることはあり得ない。

あるいは、フロイトに言わせれば、心の中のことが実現するということは発狂することである。そうすると、問題行動を起こすことになる。したがって、精神分析のフロイディアン側には「自己実現」という言葉はない。他の方々は使われているが、それは自分の心の中の真実に向き合って、それが現在に生かされるようになることである。対してそれが自己実現であり、自分探し、あるいはいろいろとそういうことを楽観的に言われることがある。

しかし、我々はないと思っている。むしろ、過去を取り戻せない、もう一度やり直すことができない、できるのは引きずっている物語を書き直すことくらいだという考えである。人生を語る上で使う言葉や語り方を変えることは確かに今を楽にする方法かもしれないが、人生をもう一度やり直すことはできないので、自己実現はないと言うのである。

それから、先ほどから強調しているように、神経症、あるいはヒステリーと呼ばれる人たちが問題になったのは、時代背景が強く影響している。または、国がないと言われていたユダヤ人だからこそ、アイデンティティの確立が課題だった。

② 「日本の精神分析」の二重性？

この発想は日本人にも果たして通用するのかという議論もある。日本人には日本人の生き方があるのではないか、このように「言語、言語」と言っている日本人は言語ではなく、むしろ以心伝心、阿吽の呼吸など、そういうことで生きているのではないかということで、日本の精神分析は昔からこの戦いに巻き込まれている。「先生が言われたのは外国人の発想で、日本人は『甘え』だ」と言われたりする。

土居先生は「甘えの理論」を唱え、むしろ海外の精神分析に対して、日本人の発想を発信されて『甘えの構造』という本を書かれたくらいで、「日本人には日本人の無意識がある」と言われている。「だから、感染者数がこのくらいで済んでいる」「日本人は海外とは違うのではないか」というようなファンタジーがあって、これはもうすぐだめになってしまうかもしれないが、今でも有効とされるところで「日本人にはファクターXがある」という説がある。これは、ファクター無意識である。

私もこれはあり得るのではないかと思う。日本人の心というのは、もしかするともう一つ考慮すべきものとしてあるのかもしれない。じつは、それに取り組んではいる。むしろ、このように言葉を手に入れて、日本人の独特なところや、日本人と世界の人たちはどこが同じなのかなどと考えている。面白いことに、海外の学会で発表すると、例えば、日本人は生まれてしばらくは母親と一緒に過ごすのが、西洋人は生まれてすぐに離されて「お母さん」と呼んでも母親はなかなか戻って来ないという違いが明白になる。とすれば、これでは全く違う人間が育つと思われる。したがって、日本では当然「甘え」が引きずられるし、西洋では「甘えられない」という状況が引きずられてしまうことになる。その結果、西洋人は「だから、お前たちはすぐに麻薬に手を出す」と言われ、日本人は「いつまでも甘えん坊で決心できないから、何事も決断できない」と言われる。そして、そういうやり取りが言葉でできるのは戦争をするよりはマシだと言って、最後は宴会になるが、本日はならないのが残念である。

しかし、このように心のことをできる限り言葉にして、まだまだ私は、心は言葉になる要素を持っているし、言葉は使ってくれるのを待っているのではないかと思っている。

※講演終了後、参加者に向けて、ネットを使って精神分析の話をする「北山ウェビナー」(2020年9月から1年間、全9回開催)を紹介。これはビデオ会議サービス「Zoom」によるシステム「Webinar」を使っており、以降も開催されているので、関心のある方はまず動画にて視聴していただければと思う。

質疑応答

- Q1 社会的動物である「人」にとって、社会性の中に自己実現はあるのではないか
- Q2 フロイトと日本人の違いはどこから来ているのか
- Q3 パーソナリティの問題は何に由来するのか
- Q4 精神分析医の考え方の違いによって症状の改善に違いがあるのか
- Q5 日本人の子育てと外国人の子育てはどう違うのか
- Q6 演じることや音楽の世界で精神分析はどのような意味があるのか
- Q7 フロイトとユングの違いは何か
- Q8 資料の写真は何か

Q1 社会的動物である「人」にとって、社会性の中に自己実現はあるのではないか

フロイトの心理学は、精神疾患を患った個人をどのように回復させるかという、個人の救済である。自己実現はないとフロイト心理学を表現されたが、私はそうは思わない。人は社会的動物であると言われる。その点をモノローグではなく、ダイアログとして質問すると、社会性の中に人の自己実現があるのではないか。企業の中でも小さな集団、大きな集団の中の自己実現は結果的に社会性の中で生きるのではないかと思うが、どう思われるか。

(きたやま)

(自己実現が)あると思っておられる方には申し訳ないが、実現することは発症することだと考えている。ただ、低級なものを高級なもので表現する昇華という概念があるが、それなら可能である。つまり、人を傷つきたいと思っている者が外科医になるとか、大工になってガンガン叩くとか、そういう実現なら可能である。

しかし、我々が若い者や動物の心のままに実現することは発狂することであるというモデルである。したがって、あると言えばあると言える。私は歌の中でなら「オラは死んじまっただ」と言えるが、現実には死んでいない。死にたいという思いは誰にでもあるけれど、それは歌の中なら実現できる。そのような考えである。

Q2 フロイトと日本人の違いはどこから来ているのか

フロイトと日本人という話があったが、端的に言えばユダヤ人と日本人ということになると思う。ユダヤ人は、イスラエル建国までは国を持たない民だったが、日本人は日本という緑豊かな国土を持って 2000 年間続いてきたので、その差があるのではないか。小松左京が『日本沈没』を書いたときも、日本人がユダヤ人のように国土を失ったらどう生きるかということを構想したが、実現しなかった。

しかし、日本人もどこかから列島に来たわけであり、それはユダヤ人のようにどこかから追い出されて流浪してようやく日本列島にたどり着いたのか、それとも冒険心を起こして

海を渡って列島を発見したのか、日本人の大本のところにユダヤ人と日本人の間の大きな違いがあるのではないか。どう考えられるか。

(きたやま)

とても重要なポイントであり、デリケートな問題だと思う。日本人は日本人であって、固有の形で昔からここにいたと思っている人たちもいる。今のように、大陸から渡ってきてここに住み着いたという説すら反論する人たちもいる。あるいは、ある家が代々続いていて、途切れたことがないと主張する人たちもいる。しかし、それは幻想に満ち満ちた考え方であるという捉え方ができる。

ただ、一つ言えるかもしれないと思うのは、日本人は農耕民族だが、どうも旅する民は狩猟民族であり、子どもが生まれると傍に置いておくことができなくて、どこかに出発させなければならないので、親子の絆を切らなければならない。したがって、ヨーロッパからアメリカに渡るときも、あるいはアメリカの東海岸から西海岸に行くときも、白人の子どもたちは皆出発していくという、自立と独立のようなものを目標にする心理学が必要だった。つまり、自立と独立が課題なので、父親・母親と子どもの間は切れるわけである。

ところが、日本人は農耕民族で、ほとんどの人がこの国から出ない。そして、海外に行っても戻ってくる人が多いし、この国から出ようとすると、後ろ髪を引かれるような思いをするし、この国に戻って来て畳の上で死にたいと多くの人が思っている。ここは安心で、ウィルスが入って来ようとしても神風が吹いて環境を良くしてくれるので、幻想として日本人は独特の守られ方をしている。

この日本という国を信じて止まないことを「日本教」と山本七平氏は呼んだが、この差はどうも幻想の違いにあると思われる。事実関係や歴史よりも物語としての真実 narrative truth で、物語で日本をどう語るかという、幻想に満ち満ちた語り方に違いがあるようである。私はそう思う。事実関係としては、どこかの国から渡ってきて、科学的に調べれば元々皆がこの国の人間ではないという事実があるかもしれないが、幻想として神風が吹くとどこかで思っている。この幻想はなかなか壊れないのではないか。

ただ、トラウマや外傷体験を経験している人たちはとんでもない親に育てられているので、我々が共有している空想とは違っている。本当に鬼のような親に育てられていることを知っているので、少し物語が違う。そういうところでは、西洋人が見つけた、言葉にして幻想を少し解放し、幻想の背後にある我々が秘密にしている物語を明らかにするという精神分析の方法が有効であり、この国で苦しんでいる人たちにはまだまだ役に立てるかもしれないと思っている。多くの能天気な人たち、親方日の丸の人たちは、楽に幸せに暮らしていけるのであればそれでよいと思うが、悲劇的な物語を抱え込んでしまった人たちには、こういう考え方が必要ではないかと思っている。

Q3 パーソナリティの問題は何に由来するのか

私は医療関係者だが、困る人はパーソナリティの問題、ハラスメントや自己愛が強い人な

が多い。そういうパーソナリティは元々あるものなのか、遺伝的なものなのか、どのように考えられているか。

(きたやま)

とても大事な質問だと思う。分かりやすく言うと、1/3 が遺伝、1/3 が育ち、1/3 が分かっていない要素があるくらいの感覚で捉えている。育ちで決まった部分に関しては変更可能、つまり後から経験したことによって物語を書き直すことができるだろうと考えて、その1/3 に懸けているのが心理療法であり、精神分析だと思う。そういう考え方なので、全部が変わるとは思っていない。ただ、ガンの発症も環境や育ちによって決定されている部分があると言われているくらいであり、例えば、統合失調症の有名な研究によると、同じ遺伝子の素因を引き受けてしまった双子であっても、育った環境によって発症に差が出るということである。したがって、遺伝の要素があったとしても、心理的要因は大きく影響していると思うので、その心理的な部分を取り扱っていると考えている。

与えられた遺伝子は、環境と同じでなかなか変えようがない。あるいは、日本人であることと同じで、これも変えようがないが、どう生きるかという部分は、遺伝子ではなく、考えの自由な範囲で取り扱いが決まる、あるいは育てられ方、文化で決まる部分等の余地を残していると思う。

したがって、一対一対応や世界を二分法で考える、「あれか、これか」「all or nothing」ではなくて、精神療法という発想は、第三の方法があるとか、余地が残っているとか、遊びの要素があるとか、余裕があるというような部分を作っていくと考えている。

Q4 精神分析医の考え方の違いによって症状の改善に違いがあるのか

例えば、ヒステリーや神経症などの精神疾患のような症状が良くなるプロセスとして、本日の話で、過去に遡って、それが言語化されていくことによって改善されていくと理解したが、そのプロセスは精神分析者などの治療者がいて成り立つ。個人だけではそのプロセスは達成できないと理解してよいのか。

また、そのときに、治療者としての精神分析医にもいろいろな人がいると思うが、誰でも治療者として当たれば改善するのか、それとも人によって経験や考え方が違うところから改善に違いが出てくるのか。

(きたやま)

とても重要なところだと思う。二つ質問があったが、一つは他者が必要なのかどうかという問題で、もちろん一人でも本を読んだだけで、あるいは、講義を聞いただけで少し楽になったという方もおられる。また、芸術に触れること、鑑賞することでも楽になることがある。最近ではラジオやYouTubeで小説を聴くことができるようになり、私も今、山本周五郎の朗読に嵌まっていて、最後は必ず泣きながら聴いている。切ない階級差に翻弄される二人が何とか出会おうとする様に、こういう生き方もあるのかと思うと泣けてくる。そして、涙しながら物語をたどっていくと、一冊読み終わった後に「良かった」という思いがある。そのよ

うに聴く小説に嵌まっているが、あのカタルシス体験は一人でもできると思う。ただ、それに嵌まらないとか、ぴったりした物語に出会わなければ、自分の人生との重ね合わせができない。あるいは、年齢も70歳を超えたから山本周五郎が良いのだと思う。60歳の頃はまだ分からなかったかもしれない。したがって、一人でもできないことはないと思うが、やはり鏡というか、文学、芸術というか、先ほど昇華と言ったが、そういう生々しいものを高みに上げてくれる装置が必要である。

これを個別の物語にして受け止めてくれて、再構成してくれて、私の小説としてもし返してもらえらば、この他者はプロとして、そういう職業として成立し得る仕事を引き受けていると思う。それは2000年～3000年前からあった仕事で、長老や神に仕える者たちが引き受けていたし、あるいは占い師や、どのようなまちや文化にもネイティブヒーラーがいて「それは門構えが北向きだからだ」などと言って、何かの説明で不幸な物語を書き換えていたのだろうと思われる。

したがって、何かとの出会いなくしてはだめだという意味で述べると、我々は自分の顔を見ることができない。確かに鏡は顔を映してくれるが、私の性格や心のあり様は誰も映してくれない。ただ親だけが「お前は甘えん坊だ」とか「お前は女の腐ったような奴だ」と言って、私の心に名前を付けて返してきたと思う。でも、それを他者が「あなたは、あのとき『女の腐ったような奴だ』と言われていた」と読み取ってくれたら「ああ、そうだったのか」という気づき生まれる。だから、心を読んでもくれる装置は、一生かけても、何千年経っても人間の仕事だろうと思うし、重要な他者としての母親や父親が物を言うのだと思う。これは前述のように勝手に名前を付けて、「お前は役立たずだ」「お前は愛嬌がないが、人柄だけはいい」などと言い、その上「そんな子、お母さんは知らない」と無茶苦茶言ってくる。知っているのに「そんな子は産んだ覚えがない」と言うのである。覚えがあるに決まっているではないか。それを我々は言われっ放しで育て自分の物語にしてしまっている。それを山本周五郎は読み取るのである。「女というのはこういう風に生きなければならない」と言われて育った子が、変わる瞬間を描いている。そういう物語の書き直しや、どう言われて育ったのかというのを読み取ってくれるのも他者、勝手に読み方をするのも他者である。

そうすると、ご指摘のように、この他者が狂っていたらどうするのかという問題が出てくる。『ガス燈』という有名な映画があるが、とんでもない夫と結婚したために、夫によって妻が発狂させられてしまうという物語である。ここから「ガスライティング」という動詞が生まれているが、専門家にもこれをする者がいると言われている。つまり、そそのかしや吹き込みのようなことで、「お前の病気はお母さんのせいだ」と吹き込まれると、とんでもないことが起こってしまう。それはご指摘のとおりで、精神分析をする人間がどういう人間なのかによって、結果は違ってしまう。

そこで、日本精神分析協会の元会長としては、ある意味で「この人は大丈夫」という認定をしている。それでも危ない人がいるかもしれないが、やはりどこかでライセンスや訓練、審査等が必要な領域ではないかと思う。それでも事故は起きると思う。だから、フロイトは

「人々の心の鏡であれ」と言っているが、それは「人々の模範になれ」という意味ではなく、「人々の心を映し出す鏡」であって「歪みがあってはならない」と言っているのである。

しかし、どうしても我々には好き嫌いがある。やはり私は巨人ファンが嫌いなので、巨人が勝って喜んでいる人には嫌味を言いたくなるという、衝動を感じることを自覚していなければならない。それが訓練であり、反省的思考であり、私が精神分析を受けなければならないと言っているところである。つまり、精神分析家は精神分析を受けなければ精神分析家になれないというのは、ここに根拠がある。だから、とても大切な質問だと思う。

Q5 日本人の子育てと外国人の子育てはどう違うのか

親子関係について、日本人は川の字になって寝るなど、愛情を注げるだけ注ぐが、その愛情の注ぎ方に最近「毒親」という言い方もある。結局、自分に依存してくる子どもを育てるか、自己を確立して自立していく子どもを育てるかということで、例えば親が子どもを悪し様に言う場合、そこには愛情があって、子どものためと思っていても親の主観が入る。そのために子育ては難しいし、対人間はとても難しい。ただ、日本人は日本語を共有していることが強いのではないかと思っている。その点に関して、外国と日本の違い、日本語と子育て、自立と深層心理と表層心理の違いをどのように考えられているのか。

(きたやま)

私の関心がある領域の質問である。先ほど紹介した Webinar というオンラインの私の講義もその領域にある。フロイトの言ったことはそれなりに整合性があり、完成度が高いし、これだけのまとまりを持っていると言われるが、日本に取り入れるときにはどうしても異なった理解をされてしまうし、フロイトにも限界がある。日本語に置き換えると別の言い方になってしまうので、どうしても違う理解をしてしまうとか、あるいは日本が神に守られている空想、幻想は非常に強烈なので、自立や独立に向かわせしめる精神分析の発想は、依存や甘え等の要素によって抵抗に合うし、それを考慮した成熟観を持たなければならないという考え方でいる。したがって、我々は自立というよりは相互依存、相見互い、互いに協力し合って甘え合うような成熟が重要だという発想を私は持っている。

そのため、学ぶところはあるが、「日本ではこうだ」という考え方があって良いのではないかと思うので、その要素を加味した精神分析、敢えて言うなら日本精神分析を堂々と語っている。それをマッカーサーは「日本人は全部子どもだ」と言ったかもしれないが、日本人には日本人の成熟観があって、そこが違うという自己紹介をしなければ、いつまで経っても日本人は子どもで、謝らないし、水に流すことを繰り返しているという日本人観を世界的に持たれてしまう。だから、私はこれを海外でも言うべきだと思っている。それは先人たちがやろうとしたことであり、私も曲がりなりにもやってきたし、日本人の限界であり、日本の特徴でもあるし、発信できるものすらあるということを主張している方である。

したがって、ご指摘のとおりで、日本人の育児の問題に尽きると思うが、本日の話に結びつけると、日本人の育児は安全で、独立した子どもを育てるよりも、傍に寝かせている方が

怪我や事故が少ないと考える。これはデータに確実に出ている。しかし、その代わりに依存心を助長しやすい。そのため、国際化するときこれが障害になる。だから日本の母親は、子どもを甘えさせることは上手かもしれないが、上手く別れることができない。子どももそのような状態にいる。こういう類の発想は、やはり海外との出会いによって得られる知恵でもあると思うし、良いところでもあるだろうと思う。それで最後に「お互い様だね」「互いから学び合おう」という境地が開かれたら良いと思って、少しでも相互理解に貢献できるようなところがあればと思って続けている次第である。

どうしても日本の学者は海外から学ぼうとするが、我々の先輩たちはこのように精神分析を取り入れ、そして国内でこのように紹介してきたということを私は忘れたくないので、ここでも相互交流を強調しているわけである。

Q6 演じることや音楽の世界で精神分析はどのような意味があるのか

ドラマで役者が意識的に精神分析を学んで、相手がどう思うかということを計算した上で演じることで、視聴率を高めるような効果を生み出すこともあるのではないかと。そういう意味では精神分析は役に立っているのではないかと思う。先生も音楽の分野で活躍されたが、音楽の分野でも精神分析を意識されたことがあるのかどうか、伺いたい。

(きたやま)

ここで私はある程度、皆さんに対して役を演じていると思うし、決して皆さんの期待を裏切らないだろうと思う。相変わらず多弁で、冗談を言いながら楽しく終われたら良いと思っている。しかし、一对一の精神分析の場面では、私のことが大嫌いになるとか、あるいは父親や母親との関係が再燃して「北山先生の言っていることは単なるベンチャラや」とか「言葉だけで少しも情緒が伝わってこない」とか「先生の顔を見ていると少しも幸せそうではない。腹の底では泣いているのではないか」等々、思春期の子どもからお年寄りまで言いたいことを吐いてくださることがある。ただ、それはここではできない。ここでは一応「精神分析を大事にしてください」と言ってお別れしたい。「精神分析など大嫌いだ」と思われるような形で別れたくないので、こういう場所では社交性を発揮していると思う。

したがって、治療とこういう場面とは違う。それでも私は人に嫌われたり、傷つけられたり、傷つけたりする要素が少ないと言われるので、それは私の性質(たち)かもしれない。でも、患者を怒らせたり、患者が分析家のことを嫌いになったり、本当に嫌いになったら来なくなってしまうのでそれは避けたいと思うが、半分くらい嫌いになったりするような場面があって初めて良くなっていくのである。振り返ってみれば、我々も成長のプロセスで「お父さんなんか死ねばいい」と思うことがあったはずである。私などは「クソばばあ」とか「クソじい」と言って大きくなった。やはり、脛をかじるとか、反抗期になるとか、両方があって初めて大人になるので、もしそのプロセスで苦労している方がおられるなら、そういうネガティブな関係を再燃させてしまうことは避けられない。そういう意味では、治療者は嫌われるのも仕事のうち、憎まれるのも仕事のうちなのである。それは親との関係が再燃する

ようなモデルなら当然である。そこが、こういう場面におけるパフォーマンスと実際の治療との違いだと思う。

Q7 フロイトとユングの違いは何か

フロイトと並んで有名な精神分析学者にユングがいるが、フロイトとユングの違いを伺いたい。前の文化庁長官だった河合隼雄先生がユングの研究家で、冗談を言いながらフルートを吹いたり、講演されたり、非常に面白い方だった。

(きたやま)

ユングに関しては専門家がおられるので、そちらから話していただきたい。

(質問者)

私の師は河合隼雄先生で、私は河合隼雄先生の京都大学の最初の弟子にあたると思う。それで、河合先生からいろいろと聞いているが、ユングについては、フロイトを非常に尊敬していたので、基本的な考え方はフロイトの考えにほぼ従っていると思う。ただ、性の理論のところに違いがある。

それに関して、北山先生に伺いたいのだが、私は精神分析学会の古くからの会員で、あまり学会には出ていなくても関心は持ち続けていた。それで、以前の精神分析学会では性的なタームがたくさん飛んでいたが、最近はそういうものが鳴りを潜めているように思う。当時は性的な言葉を使わなければ精神分析をしているように思えないという雰囲気があったが、精神分析学会自体の認識が変わったのか。その変遷なども伺いたい。

(きたやま)

ユング派とフロイトはあまり変わりがないが、性に関する考え方が違うというのは、どのように違うのか。

(質問者)

性的なことに結びつけることにユングは反発したと聞いている。ただ、私の理解では、セクシュアリティというところで言うと、人間関係そのものの結びつきであるから、そう考えるとそれほど大きな違いはないと思っている。

(きたやま)

人を結び付けるのがエロスであって、このエロスは乳児の唇がお母さんの乳房を求める気持ちに一番の起源がある。あるいは臍の緒のつながりこそが血のつながりの起源であって、それがその後の関係性の基盤になるというのがエロスの奥深い理解である。これに関しては皆共有しているが、フロイトがもう一つ重要視したのが、部分的な性欲、あるいはジェニタリティーと言われる性器のあり様で人間が決定されているという部分である。この性器のあり様で決定されるという部分に関しては、男性は突っ込んでいくし、女性は受け身になるという理解がフロイトにはあって、それが多かれ少なかれ女性のセクシュアリティ、メンタリティーを決定している、女性の受け止めて受胎するというあり様と、男性の突撃型、侵入型という、そういう性器のあり様で人間の考え方や生き方が決まるという、雌雄を決する

二分法的な考え方である。

これが、ご指摘のように、今は鳴りを潜めている。それは、フェミニズムに対して表現が悪く、これを言うと、政治的に不適切なのである。これを持ち出すと、翌日、精神分析学会に行けなくなるくらいまで立場を失うのではないかということで、大きな意味での国際的な精神分析学会では、あまり男性器の有無をメンタリティを決定するものとして取り扱わないことになってしまっている。しかし、事実はどうだろうか。やはり我々のメンタリティを考えると、女性性、男性性、つまり女性らしさ、男性らしさは思考や感じ方、生き方にまで及んでいると思う。山本周五郎を読めばそのままである。昔の女性が出てくる。そして男性器がなくなることを物凄く恐れたり、女性を理解することがとんでもないものを理解するものであるかのように男が感じたりする。

ピーターパンの物語の最後で、ピーターパンは今日も変わらず空を飛べるが、ウェンディは飛べなくなる。そのとき、ウェンディは象徴的に大人の女性になるわけである。こういうことは個別の精神療法、精神分析にはどうしても出てくるときがある。幼いときは男も女も同じだったのに、ある日突然、女の子はトイレでしゃがまなければならないが、男は立って用を足せるという差を知ってショックを受けるとか、男言葉と女言葉の差、これが世界中の人たちを決定してしまっている。ということは、個別の臨床ではある。しかし、フェミニズムのために発表できなくなっている。

じつは、最近、精神分析学会で議論されたばかりで、上手く表現できないが、日本の精神分析は、このことにまだはっきりと直面していないので、きちんとこれについて取り組むべきだという指摘だと思うし、そうだと思う。私のように高齢になるとこれについて話ができるが、若い人は持ち出しにくい話題である。重要な指摘をしていただいたことに感謝したい。

Q8 資料の写真は何か

用意していただいた写真を説明してほしい。

(きたやま)

これは私が使っているカウチの写真である。自由連想法というのは、このように寝椅子に横になって話を聞いていくだけである。いわゆる対面法と言われる出会い方ではなく、つながりは言葉しかない。言語にしなければ相手に届かないような設定になっているところで話をするので、ますます言葉に重点が置かれる。そういう自由連想の設定をお見せしたいである。



発 行 日	2026 年 7 月 7 日
講演著者	きたやま おさむ
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)